

厚生労働科学研究費補助金
「難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患克服研究事業）」
総合研究報告書

重症多形滲出性紅斑に関する研究

研究代表者 森田栄伸 島根大学医学部皮膚科 教授

研究要旨

本研究班で作成した Stevens-Johnson 症候群 (SJS) / 中毒性表皮壊死症 (TEN) の診療ガイドライン 2016 の普及を図る目的で、診療ガイドラインに沿った治療を提供できる重症薬疹診療拠点病院の認定を行った。本研究班が主催する講習会の受講と院内の診療連携体制を確認し、2017 年度に 37 大学病院、2018 年度に 23 大学病院、2019 年度に 32 医療施設（合計 92 病院）を認定した。

重篤副作用対策マニュアルの SJS と TEN の項目を診療ガイドラインに沿って改訂した。本研究班のホームページを開設し、診療ガイドライン 2016 の内容、臨床研究の進展状況などを公開した。

SJS/TEN の発症背景を明らかにする目的で、重症薬疹患者および対照者の DNA 収集を継続して行った。カルバマゼピンによる重症薬疹発症リスク遺伝子である HLA-A*31:01 及びアロプリノールによる重症薬疹発症のリスク遺伝子である HLA-B*58:01 の LAMP 法による迅速測定法を開発した。糖尿病治療薬 DPP-4 による水疱性類天疱瘡の発症リスク遺伝子として HLA-DQB1*03:01、抗てんかん薬フェニトイン誘発薬疹の発症リスク遺伝子として CYP2C9*3 および HLA-B*51:01、サルファ剤による重症薬疹の発症リスク遺伝子として HLA-A*11:01 を特定した。

疫学調査については、2008 年に本研究班で実施した全国調査から 10 年が経過するため再度全国疫学調査を実施した。一次調査として 705 科からの回答が得られた（回収率は 58.5%）。一次調査回答のあった施設に二次調査を行い、160 施設から調査票を回収し、SJS 315 例、TEN 174 例を収集した。今回の調査で、10 年間における治療法や予後の変化が明らかになり、診療ガイドラインの普及が示された。

臨床研究については、「重症薬疹に対するステロイドパルス療法の有用性に関する多施設共同臨床研究」を実施し、2020 年 3 月 31 日時点で 6 例を登録し、評価が終了した。台湾での登録 5 例を合わせて解析し、ステロイドパルス療法の有用性を評価する予定である。眼症状の予後の解析では、初診時に中等症の症例が経過とともに視力低下が大きくなることが示された。肝障害の合併状況における調査では、SJS 78 例のうち 15 例、TEN 54 例のうち 10 例が DILI grade 1-4 を満たす肝障害を合併していた。薬剤リンパ球刺激試験に薬剤による好塩基球活性化試験を加えて評価し、両方陰性症例に薬剤負荷試験を実施した。その陰性的中率は 97.2% であり、薬剤の原因薬の同定に有用である可能性が示された。原因薬剤添加により患者末梢血単核球から産生されるタンパク質の解析を行い、Galectin-7 及び RIP-3 をバイオマーカーとして特定した。メラニン・紅斑メグザメーター MX18 による皮膚症状の観察が重症多形滲出性紅斑の早期の診断に応用できる可能性が示された。

薬剤性過敏症症候群 (DIHS) の重症度分類を作成するため、9 施設より 86 例の DIHS 症例を収集し、単変量ロジスティック回帰分析により、糖尿病、酸素療法の実施、長い入院期間、急性期のクレアチニン高値、極期のクレアチニン/BUN 高値、血

小板の減少が死亡に至るリスク因子として抽出された。その結果をもとに重症化予測スコアリングツール案を作成した。DIHS の診断における血清 TARC 値測定の有用性の検証のため、先進医療にて DIHS 症例と DIHS 以外の薬疹症例を比較した結果、カットオフ値 4,000pg/ml とした場合の感度 100%、特異度 85%であった。DIHS 20 例でステロイド投与量と血液中ウイルス量を比較した結果、早期にステロイド療法を開始するとヒトヘルペスウイルス-6 の再活性化は抑制され、サイトメガロウイルスの再活性化が増加することが示された。DIHS の診断基準は満たさないが、DRESS スコアで probable/definite と診断される症例が 4 例報告された。分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬による皮膚障害の症例集積を行い、実態を把握した。

研究分担者

佐山浩二・愛媛大学医学部皮膚科学教授
相原道子・横浜市立大学大学院医学研究科
環境免疫病態皮膚科学教授
末木博彦・昭和大学医学部皮膚科学主任教授
浅田秀夫・奈良県立医科大学医学部皮膚科学教授
椛島健治・京都大学大学院医学系研究科皮膚科学
橋爪秀夫・磐田市立総合病院皮膚科部長
阿部理一郎・新潟大学大学院医歯学総合研究科皮膚科学教授
高橋勇人・慶應義塾大学医学部皮膚科学専任講師
黒沢美智子・順天堂大学医学部衛生学准教授
蒔田泰誠・独立行政法人理化学研究所統合生命医科学研究センターグループディレクター
外園千恵・京都府立大学大学院医学研究科視覚機能再生外科学教授
大山 学・杏林大学医学部皮膚科
新原寛之・島根大学医学部皮膚科
藤山幹子・国立病院機構四国がんセンター皮膚科医長

A. 研究目的

本研究班は、重症多形滲出性紅斑である Stevens-Johnson 症候群 (SJS) /中毒性表皮壊死症 (TEN) 及び薬剤性過敏症症候群 (DIHS) を対象として診療ガイドラインを策定し、その普及とともに診療ガイドラインのエビデンスに基づく改訂を行い、これらの疾患の医療の向上と均てん化を目的とする。このため、SJS/TEN、DIHS の診断基準の国際基準との整合性を見直し、ステロイド療法の見直しのための臨床研究の実施、疫学調査、診療ガイドラインの普及のため

の診療拠点病院の認定、一般国民への啓発、などを行う。

B. 研究方法

1. SJS/TEN の診療拠点病院の整備

SJS/TEN の適切な診療に必要な一定基準を満たす施設を SJS/TEN 診療拠点病院として認定する。認定の基準は、本研究班が開催する SJS/TEN の診療ガイドライン 2016 の解説を行う講習会に参加する事、SJS/TEN、DIHS の診療を行う病院内診療科 (皮膚科、眼科、集中治療部) の連携体制について確認を行うこととした。

2. SJS/TEN 診療情報・研究成果の公表

重篤副作用対策マニュアルの SJS と TEN の項目を診療ガイドラインに沿って改訂する。

本研究班のホームページを開設し、診療ガイドライン 2016 の内容、臨床研究の進展状況、SJS/TEN 診療拠点病院情報などを公開する。

3. SJS/TEN 発症の遺伝的背景の検討

重症薬疹患者およびその対照者の DNA および診療情報の収集を継続して行い、理化学研究者にて保管管理する。それを基に SJS/TEN 発症に関与する遺伝的要因を解明する。

4. SJS/TEN の疫学調査の実施

2008 年に本研究班で実施した全国調査の調査項目を基準に、再度全国疫学調査を実施する。

5. SJS/TEN 治療法向上のための臨床研究の実施

SJS/TEN に対するステロイドパルス療法の有用性を検証する目的で、「重症薬疹に対するステロイドパルス療法の有用性に関する多施設共同臨床研究」を実施する。また、

ステロイドパルス療法およびベタメタゾン点眼の眼後遺症への効果を検討する。SJS/TEN に対する新規治療法の臨床試験の研究計画を立案する。

薬疹の原因薬同定のための *ex vivo* 同定法としての好塩基球活性化試験 (BAT) の有用性評価、重症薬疹の危険因子やバイオマーカーの探索のため、臨床研究を実施する。

6. DIHS の診療ガイドラインの作成

DIHS の症例集積を行い、予後に関する因子を抽出し、その結果を基に DIHS の重症度分類を作成する。

早期診断に有用な臨床マーカーを見出し、診断精度を高める。

ステロイド療法の有効性に関する情報集積を行う。

7. 分子標的薬や生物学的製剤にみられる皮膚障害の実態調査

分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬による皮膚障害の症例集積調査を行い、その実態を把握する。

(倫理面への配慮)

本研究の実施にあたっては、観察、介入研究の被験者に危害を加える可能性については、各施設の倫理委員会に研究計画を提出し、その妥当性の評価を受けた後、被験者に研究の目的と概要を詳細に説明し、同意を得たうえで実施した。以下に倫理委員会の承認課題を示す。

「薬疹の遺伝子多型および発症因子の解析」杏林大学医学部 (125-01)、島根大学医学部 (第 1921 号)、昭和大学医学部 (承認番号 1921)、「薬剤性過敏症症候群の遺伝子多型解析」理化学研究所「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」に基づく承認、「第 2 回 Stevens-Johnson 症候群ならびに中毒性表皮壊死症の全国疫学調査」昭和大学 (承認番号 2658)、順天堂大学 (順大医倫第 2018132 号)、「Stevens-Johnson 症候群 (SJS) および中毒性表皮壊死融解症 (TEN) の眼合併症に関する疫学調査」京都府立医科大学 (承認番号 E-393-2)、「角結膜疾患の臨床経過ならびに病因解明に関する研究」(京都府立大学 C-1006-1)、「重症薬疹に対するステロイドパルス療法の有用性

に関する多施設共同臨床研究」島根大学医学部 (第 2592 号、認定番号 CRB6180008)、「アレルギー性皮膚・粘膜疾患の病態解析」慶應義塾大学医学部 (承認番号 20110133)、「炎症性皮膚疾患の症状ならびに治療の有効性の評価に関する研究」慶應義塾大学医学部 (承認番号 20160188)、「重症薬疹の予後の解析」新潟大学医歯学総合研究科の倫理委員会による承認、「重症薬疹のバイオマーカー探索および病態解析」京都大学組み換え DNA 実験安全管理委員会の承認および京都大学動物実験委員会の承認、「重症躍進における発症及び予後に関する危険因子の検討研究」横浜市立大学医学部臨床研究倫理審査委員会 (承認番号 B191000007)、「DIHS/DRESS のバイオマーカーとしての血清 TARC の臨床応用を目指した研究」奈良県立医科大学 (1460-3)、「アレルギー炎症性疾患及びウイルス性発疹症の病態及び重症化因子の解明」杏林大学医学部(承認番号 077-08)、「薬剤性過敏症症候群の重症関連因子に関する研究」島根大学医学部医の倫理委員会 (承認番号 2793)。「薬剤性過敏症症候群においてステロイドの全身投与がウイルスの再活性化に与える影響」愛媛大学医学部臨床倫理委員会承認された。実験への動物の使用は必要なものに限定し、可能な限り無駄な使用は避けるよう配慮した。また、動物実験は麻酔下を実施し、動物に与える苦痛を最小限にとどめるよう配慮した。

C. 研究結果

1. SJS/TEN の診療拠点病院の整備

2017 年から 2019 年度は、4 回の講習会を開催し、講習会を受講し、且つ病院内の連携体制を確認できた医療施設 92 病院を重症薬疹診療拠点病院に認定した。92 施設を本研究班が開設したホームページに掲載した。

2. SJS/TEN 診療情報・研究成果の公表

本研究班のホームページを開設し、診療ガイドライン 2016 の内容、臨床研究の進展状況、SJS/TEN 診療拠点病院情報などを公開した (<http://takeikouhan.jp/>)。

3. SJS/TEN 発症の遺伝的背景の検討

SJS/TEN の発症背景を明らかにする目的

で、重症薬疹患者および対照者の DNA 収集を継続して行った。カルバマゼピンによる重症薬疹発症リスク遺伝子である HLA-A*31:01 及びアロプリノールによる重症薬疹発症のリスク遺伝子である HLA-B*58:01 の LAMP 法による迅速測定法を開発した。糖尿病治療薬 DPP-4 による水疱性類天疱瘡の発症リスク遺伝子として HLA-DQB1*03:01、抗てんかん薬フェニトイン誘発薬疹の発症リスク遺伝子として CYP2C9*3 および HLA-B*51:01、サルファ剤による重症薬疹の発症リスク遺伝子として HLA-A*11:01 を特定した。

4. SJS/TEN の疫学調査の実施

全国疫学調査を、患者数を推計する一次調査と臨床疫学像を調査する二次調査として実施し、解析を完了した。一次調査の対象施設は日本皮膚科学会認定皮膚科専門医研修施設(662 施設)および全国の病院から病床数別に層化無作為抽出された施設と全大学病院の皮膚科 1205 施設とした。対象は 2016 年 1 月 1 日～2018 年 12 月 31 日の 3 年間に当該疾患で受療した患者とした。705 科から一次調査の回答が得られ、回収率は 58.5%と良好であった。その結果、調査 3 年間に SJS が 930 例(男性 380 例、女性 550 例)、TEN が 370 例(男性 185 例、女性 185 例)が病院を受診したと推計された。

二次調査として 160 施設から調査票を回収し、SJS 315 例、TEN 174 例を収集した。その結果 10 年間における治療法や予後の変化が明らかになった。

5. SJS/TEN 治療法向上のための臨床研の実施

「重症薬疹に対するステロイドパルス療法の有用性に関する多施設共同臨床研究」を 12 施設で実施し、2020 年 3 月 31 日時点で 6 例を登録し、評価が終了した。登録施設は島根大学医学部附属病院で 2 例、杏林大学医学部附属病院で 2 例、横浜市立大学医学部附属病院 2 例、合計 6 例であった。主要評価項目で有効は 4 例で 1 例は病勢進行のため脱落、1 例は死亡であった。台湾で同様のプロトコールで登録された 5 例を合わせて 11 例の経過を分析し、最終評価を行う予定である。眼症状の予後の解析では、初診時に結膜侵入、血管侵入のスコアが 1

あるいは 2 点の症例が、経過とともに視力低下が大きくなることが示された。

肝障害の合併状況における調査では、SJS 78 例のうち 15 例、TEN 54 例のうち 10 例が DILIgrade1-4 を満たす肝障害を合併していた。

薬剤リンパ球刺激試験に薬剤による BAT を加えて評価し、両方で陰性であった 36 症例に薬剤負荷試験を実施した。その陰性的中率は 97.2%であり、薬剤の原因薬の同定に有用である可能性が示された。

重症薬疹の危険因子やバイオマーカーを検索する目的で、原因薬剤添加により患者末梢血単核球から産生されるタンパク質の解析を行い、Galectin-7 及び RIP-3 を特定した。

メラニン・紅斑メグザメーターMX18 を用いて紅皮症患者の皮膚観察を行い、病勢に伴って指標に変化が見られたことから、重症多形滲出性紅斑の早期の診断に応用できる可能性が示された。骨髄異形成症候群治療薬アザシチジンの皮膚有害事象の臨床像を明らかにした。

6. DIHS の診療ガイドラインの作成

DIHS の予後に関与する因子を抽出し、その結果を基に DIHS の重症度分類を作成するため、研究班の所属施設で症例集積を進めた。本研究班の分担研究 9 施設より 86 例の DIHS 症例を収集し、単変量ロジスティック回帰分析を行なった結果、糖尿病が基礎疾患、酸素療法の実施、入院期間の長いこと、急性期のクレアチニン値が高値、極期のクレアチニン/BUN 高値、血小板の減少が死亡に至るリスク因子として抽出された。さらにこれらの結果をもとに重症化予測スコアリングツール案を作成した。

DIHS の診断における血清 TARC 値測定の有用性の検証のため、奈良県立医科大学病院及び島根大学病院において先進医療「血清 TARC 迅速測定法を用いた重症薬疹の早期診断法」を実施した。DIHS 症例 5 例、DIHS 以外の薬疹 40 例を比較した結果、カットオフ値 4,000pg/ml とした場合の感度 100%、特異度 85%であった。

愛媛大学病院を受診した DIHS 20 例でステロイド投与量と血液中ウイルス量を比較した結果、早期にステロイド療法を開始す

るとヒトヘルペスウイルス-6 の再活性化は抑制されること、ステロイドの投与によりサイトメガロウイルスの再活性化が増加することが示された。

DIHS の診断基準は満たさないが、DRESS スコアで **probable** あるいは **definite** と診断される症例が 4 例報告された。

7. 分子標的薬や生物学的製剤にみられる皮膚障害の実態調査

分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬による皮膚障害の症例集積を行い、皮膚障害の実態を把握した。

D. 考察

本研究班で作成した診療ガイドライン 2016 を普及される目的で、3 年間に重症多形滲出性紅斑の診療拠点病院として 92 施設を認定した。今後はさらに認定施設を拡大し、国内の診療レベルの向上を図るとともに、本政策班と連携して情報収集を担う活動を継続予定である。

SJS/TEN 発症の遺伝的背景に関して、カルバマゼピンによる発症リスク遺伝子として HLA-A*31:01、アロプリノールによる発症のリスク遺伝子として HLA-B*58:01、糖尿病治療薬 DPP-4 による水疱性類天疱瘡の発症リスク遺伝子として HLA-DQB1*03:01、抗てんかん薬フェニトイン誘発薬疹の発症リスク遺伝子として CYP2C9*3 および HLA-B*51:01、サルファ剤による重症薬疹の発症リスク遺伝子として HLA-A*11:01 を特定した。今後は、これらの遺伝要因を発症予防に応用して行く必要がある。

SJS/TEN の実態把握のために、全国疫学調査を行った。本研究班で 2008 年に実施した全国調査の情報と比較して、治療法では、ステロイド大量療法と高用量免疫グロブリン静注療法や血漿交換療法の組合せが多くみられた。これは後者の 2 療法が保険適用され、診療ガイドラインが普及したことを反映しているものと思われた。また TEN の眼後遺症が減少したことは、発症早期にステロイド大量療法を推奨する診療ガイドラインの普及によるものと思われた。死亡率は SJS が 4.1%、TEN が 29.9%であったが、

これは前回の調査の SJS 3.1%、TEN 19%を上回った。これは TEN 患者の平均年齢の上昇と悪性腫瘍の罹患率の上昇によるものと推定される。SCORTEN に準じた死亡数/予測死亡数の解析では、ステロイド大量療法、ステロイドパルス療法が死亡数を減少させる治療法であった。これは前回の調査と同様の結果であった。

SJS/TEN の治療に関して、本研究班の診療ガイドラインではステロイドの全身投与が推奨されているものの、国際的なコンセンサスは得られていない。このため SJS/TEN に対するステロイドパルス療法の有用性を検証する目的で、「重症薬疹に対するステロイドパルス療法の有用性に関する多施設共同臨床研究」を実施し、6 例を登録した。台湾の登録 5 例を合わせて解析し評価する予定である。

DIHS については、重症度分類作成の基礎資料とするため、86 例の DIHS 症例を収集し、単変量ロジスティック回帰分析を行なった。糖尿病、酸素療法の実施、長い入院期間、急性期のクレアチニン値高値、極期のクレアチニン/BUN 高値、血小板の減少が死亡に至るリスク因子として抽出された。さらにこれらを踏まえて重症化予測スコアリングツール案を作成したので、今後検証してゆく必要がある。また、血清 TARC 値の迅速測定の実進医療の結果、カットオフ値 4,000pg/ml とした場合の感度 100%、特異度 85%であり、目標設定基準を達成した。

また、DIHS 症例で早期にステロイド療法を開始するとヒトヘルペスウイルス-6 の再活性化は抑制されるが、サイトメガロウイルスの再活性化が増加することが示され、今後重症度に応じたステロイド療法の指標を作成する必要があると思われた。また、DIHS の診断基準は満たさないが、DRESS スコアで **probable** あるいは **definite** と診断される症例が報告され、診断基準の見直しの必要性も示された。

分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬の使用が急速に増加しており、新たな皮膚障害が発生することが予測されるため、

分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬による皮膚障害の症例集積を行い、皮膚障害の実態を把握した。

E. 結論

国内全都道府県に亘る 92 医療施設を重症薬疹診療拠点病院として認定した。

重症多形滲出性紅斑患者および対照者の DNA 収集を継続して行い、カルバマゼピン、アロプリノール、フェニトイン、サルファ剤（スルファメトキサゾール、サラゾスルファピリジン）による発症リスク遺伝子を明らかにした。

SJS/TEN の全国疫学調査を行い、10 年前の全国疫学調査結果を比較した結果、治療法や予後の変化が明らかになり、診療ガイドラインの普及が示された。

「重症薬疹に対するステロイドパルス療法の有用性に関する多施設共同臨床研究」を開始し、11 例を登録評価した。

眼症状の予後の解析では、初診時に結膜侵入、血管侵入のスコアが 1 あるいは 2 点の症例が、経過とともに視力低下が大きくなることが示された。

肝障害の合併状況における調査では、SJS 78 例のうち 15 例、TEN 54 例のうち 10 例が DILIgrade1-4 を満たす肝障害を合併していた。

薬剤リンパ球刺激試験に薬剤による BAT を加えて評価し、両方で陰性であった 36 症例に薬剤負荷試験を実施し、その陰性的中率は 97.2% であり、薬剤の原因薬の同定に有用である可能性が示された。

重症薬疹の危険因子やバイオマーカーを検索する目的で、原因薬剤添加により患者末梢血単核球から産生されるタンパク質の解析を行い、Galectin-7 及び RIP-3 を特定した。

メラニン・紅斑メグザメーターMX18 が重症多形滲出性紅斑の早期の診断に応用できる可能性が示された。

DIHS については、重症度分類作成のための調査項目を設定し、非生存のリスク因子を抽出した。早期診断の補助となる血清

TARC 値の迅速測定を先進医療として実施し、45 例の解析からカットオフ値 4,000pg/ml は感度 100%、特異度 85%を示した。ステロイド療法は内在性ヘルペスウイルスの再活性化に関与すること、DIHS の診断基準は満たさないが、DRESS スコアで probable あるいは definite と診断される症例が見られることが明らかとなった。

F. 研究発表

1. 論文発表

研究成果の刊行に関する一覧表参照

2. 著書

研究成果の刊行に関する一覧表参照

3. 学会発表

森田栄伸

【2017 年度】

1. Hiroyuki Niihara, Kunie Kohno, Eishin Morita: Rrapid detection of HLA-A*31:01:02 using loop-mediated isothermal amplification method. The 3rd Stevens-Johnson syndrome symposium, kyoto, Feb 3-4, 2018
2. 白神英莉, 千貫祐子, 野上京子, 森田栄伸: 蕁麻疹・アナフィラキシー型薬疹検索のために負荷試験を施行した 3 例. 日本皮膚科学会第 133 回山陰・第 29 回島根合同開催地方会. 米子市, 2017 年 9 月 10 日
3. 飛田礼子, 千貫祐子, 吉田暁子, 森田栄伸: 豆乳アレルギー 6 例における Gly m4 特異的 IgE 検査、好塩基球活性化試験、皮膚テストの有用性の検討. 第 69 回日本皮膚科学会西部支部学術大会. 熊本市, 2017 年 10 月 28 日~29 日

【2018 年度】

1. Hiroyuki Niihara: The utility of HLA-A*31:01:02 LAMP assay and HLA-B*58:01:01 LAMP assay in patients with cutaneous adverse drug reaction. The 4rd Stevens-Johnson syndrome symposium, kyoto, Jan 26-27, 2019
2. Chinuki Y, Ito k, Ueda K, Morita E: Incidence of an anaphylaxis significantly decreased by avoiding cetuximab

administration for the subjects sensitized against galactose-alpha-1,3-galactose (alpha-Gal). International Investigative Dermatology 2018. Orlando, May 17, 2018

3. Niihara H, Kohno K, Morita E: Rapid detection of HLA-A*3101 and HLA-B*5801 by Loop mediated isothermal amplification (LAMP). The 10th International Congress on Cutaneous Adverse Drug Reactions. Shimane, November 11, 2018
4. Komatsu-Fujii T, Chinuki Y, Niihara H, Hayashida K, Ota M, Kaneko S, Morita E: The thymus and activation-regulated chemokine (TARC) level in serum at an early stage of a drug eruption is a prognostic biomarker of severity of systemic inflammation. The 10th International Congress on Cutaneous Adverse Drug Reactions. Shimane, November 11, 2018
5. 太田征孝, 永野佳那, 森田栄伸: 免疫チェックポイント阻害剤により多彩な irAE を生じた悪性黒色腫の 1 例. 第 48 回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会. 奈良市, 2018 年 11 月 17 日
6. 中村亮介, 岡本(内田)好海, 千貫祐子, 斎藤嘉朗, 森田栄伸: セツキシマブによる牛肉アレルギー患者血清中 IgE 架橋活性の解析. 第 67 回日本アレルギー学会学術大会ミニシンポジウム 20. 千葉市, 2018 年 6 月 22 日
7. 永野佳那, 白神英莉, 千貫祐子, 森田栄伸: イブプロフェンとロキソプロフェンによる固定薬疹の 1 例. 第 70 回日本皮膚科学会西部支部学術大会. 松江市, 2018 年 11 月 10 日
8. 小松貴義, 千貫祐子, 新原寛之, 林田健志, 太田征孝, 金子 栄, 森田栄伸: 薬疹早期における血清 TARC 値は薬疹の重症度予測マーカーとなりうる. 第 70 回日本皮膚科学会西部支部学術大会. 松江市, 2018 年 11 月 10 日～11 日
9. 小松貴義, 千貫祐子, 新原寛之, 林田健志, 太田征孝, 金子 栄, 森田栄伸: 初診時の血清 TARC 迅速測定によって DIHS の早期診断が可能であった 1 例.

第 70 回日本皮膚科学会西部支部学術大会. 松江市, 2018 年 11 月 10 日～11 日

【2019 年度】

1. Ochi Y, Chinuki Y, Morita E: A case of maculopapular exanthema with pancytopenia showing undetectable serum TARC level. The 24th World Congress of Dermatology. Milano, June 10-15 2019
2. 新原寛之, 河野邦江, 東 耕一郎, 越智康之, 中川優生, 白築理恵, 太田征孝, 飛田礼子, 千貫祐子, 金子 栄, 森田栄伸: カルバマゼピン誘導型薬疹例における HLA-A31:01 の LAMP 法による検出のまとめ. 日本皮膚科学会 136 回山陰・第 32 回島根合同開催地方会. 出雲市, 2019 年 3 月 3 日
3. 永野佳那, 千貫祐子, 飛田礼子, 越智康之, 伊藤礼司, 森田栄伸: アスピリン蕁麻疹における内服可能な非ステロイド性抗炎症薬 (NSAIDs) の検討. 第 118 回日本皮膚科学会総会. 名古屋市 2019 年 6 月 6 日
4. 越智康之, 千貫祐子, 森田栄伸: 血清 TARC が検出限界以下を示した血小板減少を伴う幡種状紅斑丘疹型薬疹の 1 例. 第 71 回日本皮膚科学会西部支部学術大会. 高知市, 2019 年 9 月 7 日

相原道子

【2017 年度】

1. 相原道子: 教育講演 12 薬物アレルギー. 第 66 回日本アレルギー学会学術大会, 東京, 2017,6,18.
2. 小野 蘭, 田代康哉, 安藤はるか, 渡辺秀晃, 末木博彦, 水川良子, 大山 学, 井川 健, 小豆澤宏明, 浅田秀夫, 池田信昭, 山口由衣, 相原道子: 細胞増殖に作用する分子標的薬による皮膚障害の検討. 第 81 回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2017,11,19.
3. 中村和子, 相原道子: 教育プログラム 1 「皮膚アレルギー・過敏症検査入門」薬物アレルギー. 第 80 回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 横浜, 2017,2,11.
4. 渡邊裕子, 山口由衣, 相原道子: シンポジウム 8 「薬剤による皮膚障害」分子標

的自己免疫疾患治療薬による皮膚障害.
第 80 回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 横浜, 2017,2,12.

5. 渡邊裕子, 山口由衣, 高 奈緒, 東平麻維, 向所純子, 武山紘子, 和田秀文, 相原道子: ニボルマブ投与後に中毒性表皮壊死症を生じ, 経過中に様々な免疫関連有害事象を続発した 1 例. 第 80 回臨床アレルギー研究会, 東京, 2017,11,25.
6. 渡邊裕子, 山口由衣, 高 奈緒, 東平麻維, 川村知佳, 向所純子, 武山紘子, 高村直子, 和田秀文, 相原道子: ニボルマブ投与後に中毒性表皮壊死症を生じ, 経過中に様々な免疫関連有害事象を続発した 1 例. 第 47 回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会 第 41 回皮膚脈管・膠原病研究会, 鹿児島, 2017,12,9.
7. 泉 佳菜子, 猪又直子, 高 奈緒, 富樫結, 佐野沙織, 鈴木亜希, 小田香世子, 相原道子: リバスタチグミン経皮吸収剤による接触皮膚炎症候群の一例. 第 80 回臨床アレルギー研究会, 東京, 2017,11,25.
8. 高村直子, 山根裕美子, 松倉節子, 中村和子, 渡邊裕子, 山口由衣, 蒲原 毅, 池澤善郎, 相原道子: 当科における Stevens-Johnson 症候群(SJS), 中毒性表皮壊死症(TEN)の治療・予後の臨床解析. 第 80 回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 横浜, 2017,2,11.
9. 岩田潤一, 渡邊裕子, 武山紘子, 相原道子: 胆管造影に使用したアミノトリゾ酸(ウログラフィン®)による多発性固定薬疹の 1 例. 日本皮膚科学会第 872 回東京地方会, 横浜, 2017,6,17.
10. 川村知佳, 渡邊裕子, 岩田潤一, 向所純子, 梅本淳一, 大川智子, 松村彩子, 中嶋ゆき, 松本憲二, 相原道子: 悪性リンパ腫に対する同種骨髄移植後に生じた toxic epidermal necrolysis(TEN)の 1 例. 日本皮膚科学会第 871 回東京地方会, 伊勢原, 2017,1,21.
11. 高 奈緒, 渡邊裕子, 向所純子, 川村知佳, 東平麻維, 小田佳世子, 武山紘子, 池宮城秀崇, 相原道子: エタンブトール

が原因薬剤と考えられた Stevens-Johnson 症候群の 1 例. 日本皮膚科学会第 875 回東京地方会, 横浜, 2017,11,11.

【2018 年度】

1. Watanabe Y, Yamaguchi Y, Mukaijo J, Takamura N, Takeyama H, Ikeda N, Wada H, Aihara M: Toxic epidermal necrolysis followed by nivolumab therapy in a patient with malignant melanoma. The 5th EADC(Eastern Asia Dermatology Congress), Kunming, China, 2018,6,20-23.
2. Takamura N, Yamaguchi Y, Watanabe T, Watanabe Y, Aihara M: Characteristics of circulating dendritic cells in patients with cutaneous adverse drug reaction. IID (International Investigative Dermatology) 2018, Orlando, 2018,5,18.
3. Takamura N, Yamaguchi Y, Watanabe T, Watanabe Y, Aihara M: Proportion of circulating dendritic cells is decreasing in patients with severe cutaneous adverse drug reaction. iSCAR(The 10th International Congress on Cutaneous Adverse Drug Reactions) 2018, Shimane, 2018,11,10.
4. 相原道子: 教育講演 14 薬剤アレルギー—診断と検査. 第 67 回日本アレルギー学会学術大会, 千葉, 2018,6,24.
5. 山口由衣: 教育講演 5 重症薬疹の診断と治療 分子標的薬による皮膚障害 up to date. 第 117 回日本皮膚科学会総会, 広島, 2018,6,1.
6. 渡邊裕子, 富樫 結, 相原道子: 水痘・帯状疱疹ウイルスが関与した Stevens-Johnson 症候群の 1 例. 第 82 回臨床アレルギー研究会, 東京, 2018, 11,24.
7. 高村直子, 渡邊裕子, 富樫 結, 岩田潤一, 武山紘子, 相原道子: 感染症の関与が疑われた Stevens-Johnson 症候群(SJS)の再発例. 日本皮膚科学会第 880 回東京支部合同臨床地方会, 東京, 2018,7,21.
8. 高村直子, 山口由衣, 渡邊友也, 渡邊裕子, 相原道子: 重症薬疹の治療経過にお

ける末梢血・皮膚浸潤樹状細胞の動態解析. 第48回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会, 奈良, 2018,11,18.

9. 高橋沙希, 高村直子, 浅井知佳, 石川秀幸, 渡邊裕子, 相原道子: 高齢で発症した中毒性表皮壊死症(TEN)の1例. 日本皮膚科学会第881回東京地方会, 横浜, 2018,9,8.
10. 富樫 結, 渡邊裕子, 袋 幸平, 岩田潤一, 武山紘子, 小田佳世子, 浅田秀夫, 相原道子: 再発を繰り返した水痘・带状疱疹ウイルスによる Stevens-Johnson症候群の1例. 第48回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会, 奈良, 2018,11,18.
11. 戸塚みちる, 渡邊裕子, 浅井知佳, 高橋沙希, 石川秀幸, 高村直子, 荻原真由美, 相原道子: 水疱, びらんを伴った liposomal doxorubicin による間擦疹型皮膚障害の1例. 日本皮膚科学会第879回東京地方会, 厚木, 2018,6,16.
12. 袋 幸平, 渡邊裕子, 武山紘子, 泉 佳菜子, 小田香代子, 白田阿美子, 宮野薫, 上杉康雄, 相原道子: Allylisopropylacetylurea のオープンテストで診断し得た多発固定薬疹の1例. 日本皮膚科学会第877回東京地方会, 横浜, 2018,1,20.

【2019年度】

1. 相原道子: 小児皮膚科学のすすめ 研修4 重症薬疹を治療する. 第118回日本皮膚科学会総会, 名古屋, 2019,6,9.
2. 荒川憲昭, 塚越絵里, 中村亮介, 泉高司, 大野泰雄, 高松一彦, 西矢剛淑, 相原道子, 橋爪秀夫, 阿部理一郎, 浅田秀夫, 斎藤嘉朗: 重症薬疹の血液バイオマーカー探索と臨床的有用性の評価. 第40回日本臨床薬理学会学術総会, 東京, 2019,12,4
3. 池田信昭, 山口由衣, 浅田秀夫, 末木博彦, 大山 学, 井川 健, 相原道子: 免疫チェックポイント阻害薬による皮膚障害の実態調査及び重症化因子の解析. 第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会, 横浜, 2019,12,1.
4. 金岡美和, 向所純子, 池田信昭, 中村和

子, 松倉節子, 蒲原 毅, 西江 渉, 相原道子: Dipeptidyl peptidase-4(DPP-4)阻害薬内服患者に生じた水疱性類天疱瘡46例の臨床的検討. 第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会, 横浜, 2019,11,30.

5. 渡邊裕子, 山口由衣, 相原道子: シンポジウム2 薬剤性皮膚障害up date 免疫チェックポイント阻害薬による皮膚障害 up date. 第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会, 横浜, 2019,11,30.
6. 渡邊友也, 高村直子, 渡邊裕子, 山根裕美子, 戸塚みちる, 石川秀幸, 中村和子, 松倉節子, 蒲原 毅, 山口由衣, 相原道子: ミニシンポジウム6 薬疹 横浜市大附属2病院における Stevens-Johnson症候群(SJS)および中毒性表皮壊死症(TEN)132例の臨床解析. 第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会, 横浜, 2019,11,30.
7. 松村康子, 渡邊友也, 金岡美和, 戸塚みちる, 山川浩平, 高 奈緒, 相原道子: 咽頭粘膜炎を伴ったカルバマゼピンによる Stevens-Johnson症候群の1例. 日本皮膚科学会第884回東京地方会, 川崎, 2019,5,18.
8. 石川秀幸, 渡邊友也, 戸塚みちる, 佐川展子, 高村直子, 金岡美和, 渡邊裕子, 山根裕美子, 中村和子, 松倉節子, 蒲原毅, 相原道子: 横浜市大2病院における Stevens-Johnson 症候群/中毒性表皮壊死症患者の肺障害についての検討. 第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会, 横浜, 2019,11,30.
9. 戸塚みちる, 高村直子, 山根裕美子, 中村和子, 松倉節子, 蒲原 毅, 川島裕平, 本田 靖, 熊本宣文, 渡邊友也, 相原道子: 横浜市大2病院における Stevens-Johnson症候群/中毒性表皮壊死症患者の肝障害についての検討および肝移植に至ったSJS症例報告. 第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会, 横浜, 2019,11,30.
10. 新村智己, 金岡美和, 澤田 郁, 石川秀幸, 山川浩平, 相原道子: 明らかな誘因のない中毒性表皮壊死症(TEN)の1例. 日本皮膚科学会第886回東京地方会, 横

浜, 2019,10,19.

末木博彦

【2017年度】

1. 末木博彦：シンポジウム 実ほ身近にある免疫再構築症候群(IRIS) 拡大する免疫再構築症候群(immune reconstitution inflammatory syndrome: IRIS)の疾患概念—non-HIV IRIS 診断のポイント 第81回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京都 2017年11月18日
2. 渡辺秀晃, 小野蘭, 鈴木茉莉恵, 荻原麻里, 村上遥子, 猿田祐輔, 末木博彦: フェノバルビタールによる薬剤性過敏症候群(DIHS) —薬剤とHLAの結合様式解析を含めて—第69回日本皮膚科学会西部支部学術大会.熊本市 2017年10月28日
3. 小野 蘭, 田代康哉, 安藤はるか, 渡辺秀晃, 末木博彦, 他: 細胞増殖に作用する分子標的薬の皮膚障害の検討. 第81回日本皮膚科学会東京支部学術大会東京都, 2017年11月18日
4. 鈴木茉莉恵, 猿田祐輔, 北見由季, 渡辺秀晃, 末木博彦:アバタセプトによる乾癬型薬疹. 第81回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京都, 2017年11月19日
5. 田代康哉, 渡辺秀晃, 安藤はるか, 末木博彦：ラモトリギンによる薬剤性過敏症候群(DIHS)と他剤によるDIHSの比較検討.第47回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会・第41回皮膚脈管・膠原病研究会, 鹿児島市, 2017年12月9日
6. 村上 遥子, 鈴木 茉莉恵, 岩井 信策, 渡辺 秀晃, 池谷 洋一, 洲崎 勲夫, 末木博彦: 咽喉頭病変を伴ったStevens-Johnson症候群の1例. 第47回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 鹿児島市, 2017年12月9日
7. 新屋光一郎, 猿田祐輔, 渡辺秀晃, 末木博彦：ニボルマブによる苔癬型薬疹の1例. 第69回日本皮膚科学会西部支部学術大会, 熊本市, 2017年10月29日

【2018年度】

1. 新屋光一郎, 佐々木 駿, 須長由真, 城内和史, 渡辺秀晃, 末木博彦. バクタ配合錠によるStevens-Johnson症候群の1例. 日本皮膚免疫アレルギー学会雑誌 2(1):195, 2018.
2. 張田修平, 佐々木 駿, 新屋光一郎, 鈴木茉莉江, 北島真理子, 猿田祐輔, 北見由季, 渡辺秀晃, 末木博彦ほか: パッチテストからシアナマイドによる中毒性表皮壊死症(TEN)と推測した1例. 日本皮膚免疫アレルギー学会雑誌 2(1):195, 2018.
3. 北島真理子, 猿田祐輔, 張田修平, 渡辺秀晃, 末木博彦: ペムプロリズマブ(キイトルーダ)投与中に生じた苔癬型薬疹の1例. 日本皮膚免疫アレルギー学会雑誌 2(1):177, 2018.
4. 新屋光一郎, 猿田祐輔, 渡辺秀晃, 末木博彦：ニボルマブによる苔癬型薬疹の1例. 西日皮膚 80(3): 292, 2018.
5. 渡辺秀晃, 小野 蘭, 鈴木茉莉江, 荻原麻里, 村上遥子, 猿田祐輔, 末木博彦：フェノバルビタールによる薬剤性過敏症候群(DIHS) 薬剤とHLAの結合様式解析を含めて.西日皮膚 80(3): 278, 2018.
6. 小野 蘭, 田代康哉, 安藤はるか, 渡辺秀晃, 末木博彦：細胞増殖に作用する分子標的薬による皮膚障害. 日皮会誌 128(6): 1373, 2018
7. 鈴木茉莉江, 猿田祐輔, 小林香映, 北見由季, 渡辺秀晃, 末木博彦：中毒性表皮壊死症(TEN)と鑑別を要したthymoma-associated multiorgan autoimmunity (TAMA)の1例. 日皮会誌 128(5): 1194, 2018.
8. 末木博彦：薬疹と免疫再構築症候群(immune reconstitution inflammatory syndrome:IRIS). 日皮会誌 128(5): 973, 2018.
9. 鈴木茉莉江, 猿田祐輔, 北見由季, 渡辺秀晃, 末木博彦：アバタセプトによる乾癬型薬疹日皮会誌 128(6): 1372, 2018
10. Marie Suzuki, Yusuke Saruta, Yuka Katoh, Hideaki Watanabe, Hirohiko Sueki:Acute

generalized exanthematous pustulosis caused by hydroxychloroquine. 10th International congress on cutaneous adverse drug reactions. iSCAR in Shimane p53, 2018.

【2019 年度】

1. Sasaki S, Sueki H, Yamashita M, Shibato J, Harvey B, Hashimoto H, Takasaki I, Nakamachi T, Hannibal J, Fahrenkrug J, Shioda S : PACAP – sweat secretion and sweat gland-. The Akira Arimura Memorial VIP PACAP and Related Peptides Symposium 30years after PACAP discovery (LosAngeles, United States, 2019. 11)
2. Suzuki M, Saruta Y, Kitami Y, Watanabe H, Sueki H: Elevated serum osteopontin in drug-induced hypersensitivity syndrome/ drug eaction with eosinophilia and systemic symptoms, 24th World Congress of Dermatology 2019 (Milano, Italy, 2019.6)
3. 末木博彦 : EGFR阻害薬、マルチキナーザ阻害過中の腎障害薬 : 皮膚障害とその対策 第118回日本皮膚科学会総会。(名古屋市, 2019. 6)
4. 末木博彦 : SJS/TEN診療のポイント 第70回日本皮膚科学会中部支部学術大会。(金沢市, 2019. 10)
5. 末木博彦 : 重症薬疹の診断と治療 第4回日本アレルギー学会 総合アレルギー講習会。(横浜市, 2019. 12)
6. 張田修平, 猿田祐輔, 李 殷先, 新屋光一朗, 村上遥子, 北島真理子, 佐々木駿, 北見由季, 渡辺秀晃, 末木博彦 : 経過中graft-versus-host disease (GVHD)-like erythrodermaを呈した thymoma-associated multiorgan autoimmunity (TAMA) の1例. 第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会。(神奈川, 2019.11)
7. 須長由真, 小林香映, 新屋光一朗, 張田修平, 川崎恵吉, 三輪裕介, 末木博彦 : サラズスルファピリジンによる薬剤性過敏症症候群(DIHS) の1例. 第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学

術大会。(神奈川, 2019.11)

8. 李 殷先, 田代康哉, 荻原麻里, 渡辺秀晃, 末木博彦, 石橋 智, 永田茂樹, 國廣佳奈, 他: 皮疹軽快後に劇症 1 型糖尿病・脱毛症・橋本病を続発した薬剤性過敏症症候群.第 49 回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会(神奈川, 2019.11)

浅田秀夫

【2017 年度】

1. Miyashita K, Miyagawa F, Onmori R, Nakamura Y, Azukizawa H, Asada H: HHV-6-derived microRNAs in the serum/PBMC of DIHS/DRESS patients. The 47th Annual ESDR Meeting, Salzburg, Sept 27-31, 2017.
2. Miyashita K, Miyagawa F, Nakamura Y, Onmori R, Azukizawa H, Asada H: Association with serum/PBMC levels of HHV-6 miRNAs with clinical severity of DIHS/DRESS patients. The 42th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Kochi, Dec 15-17, 2017
3. Kawase A, Azukizawa H, Kato K, Katayama I, Asada H: Utility of IFN- γ ELISpot assay using anti PD-L1 antibodies for identifying hypersensitivity-inducing drug culprits. The 42th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Kochi, Dec 15-17, 2017
4. 浅田秀夫: 薬疹のバイオマーカー, 第47回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 鹿児島, 平成 29 年 12 月 8 日~12 月 10 日

【2018 年度】

1. Nakamura Y, Miyagawa F, Miyashita K, Ommori R, Azukizawa H, Asada H: Serum thymus and activation-regulated chemokine(TARC) is a useful maeker for assessing the clinical and immunological condition of DRESS/DIHS patients. International Investigative Dermatology 2018, Orlando, May 16-19, 2018.
2. Asada H: TARC in drug reaction with

eosinophilia and systemic symptoms/drug-induced hypersensitivity syndrome (DRESS/DIHS). The 10th International Congress on Cutaneous Adverse Drug Reactions, Shimane, Nov 10-11, 2018

3. 西村友紀、宮川史、宮下和也、小豆澤宏明、浅田秀夫: 薬剤性過敏症症候群における血清 TARC 値の重症度予測マーカーとしての有用性の検討. 第 117 回日本皮膚科学会総会, 広島市, 2018 年 5 月 31 日-6 月 3 日
4. 山本祥子、真柴久実、西川美都子、小川浩平、宮川史、小豆澤宏明、浅田秀夫: 薬剤性過敏症症候群のオーバーラップが疑われた Stevens-Johnson 症候群の 1 例, 第 48 回日本皮膚免疫アレルギー学会, 奈良市, 2018 年 11 月 16 日~11 月 18 日
5. 西村友紀、宮川史、宮下和也、小豆澤宏明、浅田秀夫: 薬剤性過敏症症候群発症後にヒトヘルペスウイルス 6 の持続感染をきたした症例の検討, 第 48 回日本皮膚免疫アレルギー学会, 奈良市, 2018 年 11 月 16 日~11 月 18 日

【2019 年度】

1. Ommori R, Miyagawa F, Azukizawa H, Kitahara T, Sho M, Muro S, Asada H: Human β -defensins are involved with pathological mechanism of cutaneous adverse effects caused by EGFR inhibitors. 49th ESDR Annual Meeting, Bordeaux, Sept 18-21, 2019.
2. Asada H, Nakamura Y, Miyagawa F, Miyashita K, Shobatake C, Ommori R, Azukizawa H: The characteristics of patients with persistent HHV-6 infection after drug-induced hypersensitivity syndrome/drug reaction with eosinophilia and systemic symptoms (DIHS/DRESS). 77th Annual Meeting of SID, Chicago, May 8-10, 2019
3. 浅田秀夫: DIHS におけるウイルス感染と免疫異常, 第 49 回日本皮膚免疫アレルギー学会、横浜, 2019 年 11 月 29 日~11 月 31 日

4. 金谷悠司、多良安紀子、有馬亜衣、正嶋千夏、小川浩平、宮川史、浅田秀夫: ステロイド治療に抵抗し、皮疹と発熱を繰り返した薬剤性過敏症症候群の一例, 第 49 回日本皮膚免疫アレルギー学会、横浜, 2019 年 11 月 29 日~11 月 31 日
5. 浅田秀夫: 薬剤性過敏症症候群のバイオマーカー~血清 TARC 値の有用性について, 第 40 回日本臨床薬理学会, 東京, 2019 年 12 月 4 日~12 月 6 日

阿部理一郎

【2017 年度】

1. 阿部理一郎、SJS/TEN の発症メカニズム、日本皮膚科学会東京支部総会、平成 29 年 11 月 18 日、東京
2. Riichiro Abe, Pathomechanism of severe adverse drug reaction: Bench to Bedside. Australasian Society for Dermatology Research, 平成 29 年 5 月 10 日、Sydney.

【2018 年度】

1. Riichiro Abe, Role of exosome mediated antigen presentation in antibiotic related allergic reactions. DHM2018, 平成 30 年 4 月 19 日、Amsterdam.
2. 阿部理一郎、薬疹のメカニズム、日本皮膚科学会東京支部総会、平成 30 年 12 月 2 日、東京

【2019 年度】

1. 阿部理一郎、SJS/TEN の発症メカニズム、日本皮膚科学会東京支部総会、平成 29 年 11 月 18 日、東京

橋爪秀夫

【2017 年度】

1. 橋爪秀夫 薬疹の話 島田薬剤師会学術講演会 2017 年 1 月 20 日 島田市
2. 橋爪秀夫 アレルギーの進歩と将来 静岡県病院薬剤師会中部支部例会講演会 2017 年 9 月 20 日 クーポール会館 静岡市
3. 橋爪秀夫 皮疹のみかた, DIHS の病態と治療 会長特別企画 2 「若手医師のための複数科にまたがるアレルギー症例の診かた」第 66 回日本アレルギー学会学術大会. 2017 年 6 月 18 日 日本東京

国際フォーラム 東京.

4. 橋爪秀夫 Progress in Drug allergy 日本臨床皮膚科学会ブロック会 2017年11月23日 コクヨホール 東京

【2018年度】

1. Hideo Hashizume, Yasuhito Kaneko, Seiya, Kitano, Reiko Kageyama. Short course of cyclosporine A (CyA) as a treatment option for drug-induced hypersensitivity syndrome (DIHS): 3 cases and review of the literature. 2018-SCAR meeting. 2018年11月10日 松江

【2019年度】

1. 橋爪秀夫 : 薬剤アレルギー・薬剤性皮膚障害 がん治療薬による皮膚障害. 第68回日本アレルギー学会学術大会, 2019年. 横浜
2. 橋爪秀夫 : 小児から成人にみられる血液腫瘍とその皮膚病変 皮膚科医から見た血液腫瘍の皮膚病変. 第108回日本皮膚科学会総会・学術大会, 2019年. 名古屋
3. 橋爪秀夫 : 多形紅斑の謎に迫る 感染症による多形紅斑. 第35回日本臨床皮膚科学会総会・臨床学術大会, 2019年4月21日 松山
4. 橋爪秀夫 : 薬疹 発症機構の基礎知識. 日本アレルギー学会 第6回総合アレルギー講習会, 2019年12月14日 東京
5. 橋爪秀夫 : 吸血生理の温故知新 マダニ刺咬症のヒトにおける免疫応答. 第71回日本衛生動物学会大会, 2019年4月20日 山口
6. 橋爪秀夫 : 薬疹の発症機序と臨床 up-to-date. 第56回日本アレルギー学会専門医認定教育セミナー, 2019年10月20日 東京

外園千恵

【2017年度】

1. Sotozono C. Diagnosis and treatment strategies of SJS/TEN with ocular sequelae. 2nd international Stevens-Johnson syndrome symposium, Kyoto, Japan,

2017.1.22.

2. 上田真由美、西垣裕美、外園千恵、木下 茂. 慢性期 Stevens-Johnson 症候群の涙液中 IP-10 の低下. 角膜カンファレンス 2017/第41回日本角膜学会総会/第33回日本角膜移植会、福岡、2017.2.16.
3. Sotozono C. The Inflamed Ocular Surface: Pterygium, MMP, SJS, and Chemical Injury · Treatment of Stevens-Johnson Syndrome. 32nd Asia-Pacific Academy of Ophthalmology (APAO2017), Singapore, 2017.3.3.
4. Yoshikawa Y, Ueta M, Inatomi T, Yokoi N, Kinoshita S, Ikeda T, Sotozono C. Long-term Clinical Course of Stevens-Johnson Syndrome with Ocular Sequelae. AAO 2017, New Orleans, USA, 2017.11.12.

【2018年度】

1. Sotozono C. Symposium : Corneal Infection/Inflammation (I). Conjunctival MRSA in Patients with Stevens-Johnson-Syndrome. The 6th Asia Cornea Society Biennial Scientific Meeting, Qingdao, China, 2018.5.17.
2. 外園千恵、三重野洋喜、上田真由美、小川葉子、佐竹良之、島崎 潤、森田栄伸. 慢性期 Stevens-Johnson 症候群の特徴的所見と診断基準. 第124回京都眼科学会、京都、2018.6.24.
3. 吉川大和、上田真由美、福岡秀記、田尻健介、稲富 勉、横田 勲、横井則彦、木下 茂、池田恒彦、外園千恵. 前眼部所見からみた慢性期 Stevens-Johnson 症候群の悪化・非悪化に関する検討. 第72回日本臨床眼科学会、東京、2018.10.12.

【2019年度】

1. Mieno H, Matsumoto K, Ueta M, Sotozono C. Corticosteroid pulse therapy and ophthalmological intervention from the early onset of SJS/TEN. SJS/TEN 2019: From Science to Translation, Vancouver, Canada, 2019.4.26-27.

2. Ueta M, Nishigaki H, Sotozono C, Yokoi N, Kinoshita S. Comprehensive miRNA analysis of conjunctival epithelium of Stevens-Johnson syndrome patients in the chronic stage. ARVO 2019 Annual Meeting, Vancouver, Canada, 2019.5.1.
3. 吉川大和、上田真由美、福岡秀記、田尻健介、稲富 勉、横田 勲、横井則彦、木下 茂、池田恒彦、外園千恵. 前眼部所見からみた慢性期 Stevens-Johnson 症候群の悪化・非悪化に関する検討. 第 123 回日本眼科学会総会、東京、2019.4.18.
4. 上田真由美、西垣裕美、駒井清太郎、吉川大和、外園千恵、木下 茂. 慢性期 Stevens-Johnson 症候群血漿の miRNA 解析ならびに重症度との関連. 角膜カンファレンス 2020 (第 44 回日本角膜学会総会・第 36 回日本角膜移植学会)、東京、2020.2.27.
5. 原田康平、日野智之、安久万寿子、石垣理穂、福岡秀記、稗田 牧、稲富 勉、横井則彦、木下 茂、外園千恵. 羊膜移植 21 年間の推移. 角膜カンファレンス 2020 (第 44 回日本角膜学会総会・第 36 回日本角膜移植学会)、東京、2020.2.27.
6. 石田 学、駒井清太郎、中村隆宏、稲富 勉、上田真由美、郷 正博、木村泰子、福島雅典、木下 茂、外園千恵. 視力改善目的における培養自家口腔粘膜上皮シート移植術の前向き研究. 角膜カンファレンス 2020 (第 44 回日本角膜学会総会・第 36 回日本角膜移植学会)、東京、2020.2.27.
7. 駒井清太郎、石田 学、中村隆宏、稲富 勉、上田真由美、郷 正博、木村泰子、福島雅典、木下 茂、外園千恵. 培養自家口腔粘膜上皮シート移植術による結膜嚢再建の前向き研究. 角膜カンファレンス 2020 (第 44 回日本角膜学会総会・第 36 回日本角膜移植学会)、東京、2020.2.27.

黒沢美智子

【2017 年度】

1. 黒沢美智子、武藤剛、横山和仁、稲葉裕、中村好一、縣俊彦: Stevens-Johnson 症候群と中毒性表皮壊死症の臨床疫学像の比較—3 種のデータを用いて. 第 76 回日本公衆衛生学会総会、鹿児島、10/31-11/2, 2017
2. 黒沢美智子、森田栄伸、稲葉裕、横山和仁: 重症薬疹 Stevens-Johnson 症候群 (SJS) と中毒性表皮壊死症 (TEN) の治療実態と予後 (死亡と後遺症のリスク). 第 82 回日本健康学会総会、恩納、11/10-11, 2017.
3. 黒沢美智子、稲葉裕: 難病対策・難病研究の現状と課題、そして将来. 第 88 回日本衛生学会総会、東京、3/22-24, 2018.

【2018 年度】

1. 黒沢美智子、稲葉裕: 難病対策・難病研究の現状と課題、そして将来. 第 88 回日本衛生学会総会、東京、3/22-24, 2018.

【2019 年度】

1. 黒沢美智子、末木博彦、須長由真、森田栄伸、小風暁、新原寛之、相原道子、浅田秀夫、阿部理一郎、橋爪秀夫、椛島健治、大山学、高橋勇人、藤山幹子、外園千恵、渡辺秀晃、中村好一: Stevens-Johnson 症候群と中毒性表皮壊死症の患者数推計: 全国疫学調査より. 第 30 回日本疫学会学術総会、京都、2/20-2/22, 2020.

筵田泰誠

【2017 年度】

1. Mushiroda T, Identification of genomic biomarkers associated with cutaneous adverse drug reactions and validation of clinical utility of genetic testing. Genomic Medicine 2017, Ho Chi Minh, August 18, 2017.
2. 筵田泰誠: 国内外におけるファーマコゲノミクス検査と層別化医療の現状. 第 39 回日本生物学的精神医学会・第 47 回日本神経精神薬理学会合同年会、札幌、平成 29 年 9 月 30 日.

3. Mushiroda T, Clinical utility of HLA-A*31:01 test for avoidance of carbamazepine-induced skin rash. The 12th Asia-Pacific Conference on Human Genetics (APCHG 2017), Bangkok, November 9, 2017.
4. Ozeki T: Genetic analysis for cutaneous adverse drug reactions induced by phenobarbital and phenytoin in Japanese population. The 3rd International Stevens-Johnson Syndrome Symposium. JSPS Core-to-Core Program “International genome study based elucidation of pathology and assembly of treatment strategy of the severe ocular surface disease”, Kyoto, February 4, 2018.

【2018 年度】

1. Ozeki T, HLA-DQB1*03:01 as a biomarker for genetic susceptibility to bullous pemphigoid induced by DPP-4 Inhibitors. The 4th International Stevens-Johnson Syndrome Symposium JSPS Core-to-Core Program “International genome study based elucidation of pathology and assembly of treatment strategy of the severe ocular surface disease”, Kyoto, January 26, 2019.
2. Ozeki T, Ujiie H, Muramatsu K, Mushiroda T, Miyoshi H, Iwata H, Nakamura A, Nomoto H, Cho KY, Sato N, Nishimura M, Ito T, Izumi K, Nishie W, Shimizu H. HLA-DQB1*03:01 as a Biomarker for Genetic Susceptibility to Bullous Pemphigoid Induced by DPP-4 Inhibitors. 日本人類遺伝学会第 63 回大会, 横浜, 平成 30 年 10 月 11 日.
3. Ozeki T, Ujiie H, Muramatsu K, Mushiroda T, Miyoshi H, Iwata H, Nakamura A, Nomoto H, Cho KY, Sato N, Nishimura M, Ito T, Izumi K, Nishie W, Shimizu H. HLA-DQB1*03:01 as a Biomarker for Genetic Susceptibility to Bullous Pemphigoid Induced by DPP-4 Inhibitors. American Society of Human Genetics (ASHG) 2018, San Diego, October 19, 2018.

【2019 年度】

1. Ozeki T. Progress and update in association studies as genomic determinants of drug-induced eruptions in Japan. The 5th International Stevens-Johnson Syndrome Symposium JSPS Core-to-Core Program “International genome study based elucidation of pathology and assembly of treatment strategy of the severe ocular surface disease”, Kyoto, February 9, 2020.
2. Hikino K. HLA-B*51:01 and CYP2C9*3 are risk factors for phenytoin-induced eruption in the Japanese population: the analysis of the data from the Biobank Japan Project. The 5th International Stevens-Johnson Syndrome Symposium JSPS Core-to-Core Program “International genome study based elucidation of pathology and assembly of treatment strategy of the severe ocular surface disease”, Kyoto, February 9, 2020.
3. 蒔田泰誠. 副作用回避を目的とした遺伝子検査の社会実装. 第40回日本臨床薬理学会総会, 東京, 2019年12月6日.
4. Hikino K, Ozeki T, Koido M, Terao C, Kamatani Y, Mushiroda T. Risk factors for phenytoin-induced eruption in Japanese population: the analysis in the Biobank Japan Project. 日本人類遺伝学会第64回大会, 長崎, 2019年11月7日.
5. 蒔田泰誠. HLA検査による副作用発現リスクの予測. 第29回日本医療薬学会年会, 福岡, 2019年11月2日.
6. Hikino K, Ozeki T, Koido M, Terao C, Kamatani Y, Mushiroda T. HLA-B*51:01 and CYP2C9*3 are risk factors for phenytoin-induced eruption in Japanese population: the analysis in the Biobank Japan Project. American Society of Human Genetics (ASHG) 2019 Annual Meeting, Houston, October 17, 2019.
7. Mushiroda T. Clinical implementation of pharmacogenomic biomarkers for avoidance of severe adverse drug reactions. The 7th China-Japan Joint Meeting of Basic and Clinical Pharmacology, Kunming,

August 4, 2019.

8. Mushiroda T. Targeted NGS panel, PKseq as an effective tool to identify pharmacogenomic biomarkers. Genomic Medicine 2019, Hanoi, June 7, 2019.

梶島健治

【2017年度】

1. 中島沙恵子: 薬疹のメカニズム. 第 81 回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 新宿/東京, 平成 29 年 11 月 18 日.
2. Nakajima S., *Candida albicans* skin colonization exacerbates the inflammation of murine psoriasis-like dermatitis: 第 46 回日本免疫学会学術大会、仙台、平成 29 年 12 月 14 日
- 3.

【2018年度】

1. 梶島健治・脂質の関わる皮膚疾患・千里ライフサイエンスセミナーM4・2018 年 11 月 20 日・大阪
2. 中島沙恵子・重症薬疹のトピックス・第 117 回日本皮膚科学会総会・2018 年 5 月 31 日・広島

【2019年度】

1. 中島沙恵子「好酸球が関与するその他の皮膚疾患」第118回日本皮膚科学会総会教育公演、2019年6月7日
2. 栗井匠, 中島沙恵子, 加来洋、野村尚史、梶島健治「エポプロステノールによる蕁麻疹型薬疹の一例」第118回日本皮膚科学会総会、2019年6月6日
3. 富安弘花、中島沙恵子、梶島健治「マヴィレットによる播種状紅斑丘疹型薬疹の一例」第49回日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会、2019年11月30日、横浜

大山 学

【2017年度】

1. 水川良子: 急性発疹症 初期対応のコツ. -何をすべきか、何をすべきでないか- 第 33 回 日本臨床皮膚科医会・臨床学術大会, 神戸, 平成 29 年 4 月 22 日.
2. 水川良子: SJS/TEN のモデルとしての固定薬疹 -なぜ、固定薬疹は SJS/TEN

にならないのか- 第 116 回 日本皮膚科学会総会学術大会, 仙台, 平成 29 年 6 月 4 日

3. Takahashi R, Sato Y, Kimishima M, Shiohara T, Ohyama M: Influence of programmed cell death-1 immune checkpoint blockade on T cell profile and respo melanoma-associated antigen in advanced malignant melanoma patients. 47th Annual ESDR Meeting 2017, Salzburg, Austria, Sep 27th-30th, 2017.
4. 水川良子, 塩原哲夫: 薬剤性過敏症症候群-臨床から診断、治療、non-HIVIRIS の概念をふまえて- 第 66 回日本感染症学会東日本地方会学術集会, 東京, 平成 29 年 11 月 1 日.
5. 水川良子, 吉池沙保里, 下田由莉江, 加藤峰幸, 早川 順, 高橋孝幸, 大山学: 皮膚筋炎加療中の帯状疱疹後に Stevens-Johnson 症候群を生じた 1 例. 第 47 回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会、鹿児島, 平成 29 年 12 月 9 日.
6. 光井聖子, 青山裕美, 水川良子, 川上佳夫: 多発性固定薬疹における局所脱感作と病変拡大部位の免疫学的検討. 第 47 回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会, 鹿児島, 平成 29 年 12 月 9 日.
7. Takahashi R, Sato Y, Kimishima M, Shiohara T, Ohyama M: Characterization of the influence of PD-1 blockade on IFN- γ , granzyme B and IL-9 production by T cells in advanced melanoma patients. 42nd Annual Meeting of JSID, Kochi, Japan, Dec 15th-17th, 2017.

【2018年度】

1. 吉池沙保里, 早川 順, 水川良子, 大山学: セレコキシブによる non-pigmenting fixed drug eruption の 1 例. 第 117 回日本皮膚科学会総会, 広島, 2018 年 6 月 1 日.
2. 下田由莉江, 伊藤有亜, 水川良子, 大山学: アザシチジンによる注射部位反応の 2 例. 第 879 回日本皮膚科学会東京地方会, 東京, 2018 年 6 月 16 日.
3. 加藤峰幸, 嵩幸恵, 福山雅大, 倉田麻衣子, 水川良子, 早川 順, 大山学:

豊胸術施行部位から発症した多形滲出性紅斑の1例. 第48回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会, 奈良, 2018年11月16日-18日.

4. 倉田麻衣子, 水川良子, 福山雅大, 青木孝司, 佐藤洋平, 大山学: 発症初期のステロイドパルス療法が奏功したStevens-Johnson症候群の1例. 第82回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2018年12月1-2日.
5. 水川良子: 新しい薬疹ー免疫チェックポイント阻害薬を中心にー. 第82回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2018年12月1-2日.
6. 水川良子: 日常診療で重要な薬疹. 第5回総合アレルギー講習会, 大阪, 2018年12月16日.
7. 朱瀛瑤, 古市祐樹, 森本亜里, 栗原佑一, 大山学, 天谷雅行, 梅垣知子: ニロチニブによる薬剤誘発性癬痕性脱毛と考えた1例. 第882回日本皮膚科学会東京地方会, 東京, 2019年1月19日.

【2019年度】

8. 水川良子: DiHSー皮膚科専門医として知っておくべきポイントー. 2019年皮膚科新レジデントセミナー⑨~薬疹の巻~, 東京, 2020年2月5日.
9. 水川良子: 重症薬疹を中心とした薬疹の診断と治療. 第14回多摩東地区スキンケアセミナー, 東京, 2020年1月25日.
10. 伊藤有亜, 倉田麻衣子, 小林英資, 下田由莉江, 佐藤洋平, 大山学, 水川良子: 重症度スコアから保存的治療を選択したカルバマゼピンによる薬剤性過敏症症候群の1例. 第888回日本皮膚科学会東京地方会, 東京, 2020年1月18日.
11. 水川良子: 薬疹. 杏林大学公開講演, 東京, 2020年1月11日.
12. 水川良子: 薬剤性過敏症症候群ー診断と治療ー. 第4回重症薬疹診療拠点病院認定に係る講習会, 横浜, 2019年12月1日.
13. 齋藤真衣, 下田由莉江, 嵩幸恵, 佐藤

洋平, 川原敬祐, 齋藤康一郎, 大山学, 水川良子: 薬剤性過敏症症候群の経過中に喉頭浮腫を生じた1例. 第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会, 横浜, 2019年11月30日.

14. 水川良子: DiHSにおけるCMV再活性化を予測するバイオマーカーの検討. 日本医療研究開発機構 難治性疾患実用化研究事業 2019年度班会議 免疫アレルギー疾患実用化研究事業 2019年度班会議 薬疹研究会, 新潟, 2019年11月22日.
15. 水川良子, 塩原哲夫: 教育講演【重症薬疹 up-to-date】重症薬疹の治療ーPSL投与の適応を考えるー. 第83回日本皮膚科学会東京・東部支部合同学術大会, 東京, 2019年11月17日.
16. 水川良子: 重症薬疹を中心とした薬疹の診断と治療ー抗ヒスタミン薬からステロイドまでー. Dermatology Update 2019, 東京, 2019年9月24日.
17. 水川良子, 塩原哲夫: 教育講演 薬剤性過敏症症候群の最適治療に有用な重症度・合併症予測スコア(DDSスコア). 第118回日本皮膚科学会総会, 名古屋, 2019年6月6日ー9日.

高橋勇人

【2017年度】

1. 栗原佑一, 堀川弘登, 舩越建, 高橋勇人, 齋藤昌孝, 谷川瑛子, 泉健太郎, 西江渉, 山上淳, 天谷雅行. DPP-4阻害薬関連水疱性類天疱瘡の臨床的特徴の検討, 第116回日本皮膚科学会総会, 仙台, 2017.6.3.
2. 福田 諒, 藤田康平, 加藤 伸, 小高利絵, 池浦一裕, 潮田裕梨, 金生茉莉, 工藤葉子, 小池将人, 佐藤英和, 大内健嗣, 高橋勇人, 中川種昭, 角田和之, マイコプラズマの関連するStevens-Johnson症候群が強く疑われた一例, 第27回日本口腔内科学会, 第30回日本口腔診断学会 学術大会, 札幌, 2017.9.8
3. 高橋勇人. 薬剤アレルギーの免疫学的理解のすすめ. 第81回日本皮膚科学会東京支部, 東京, 2017.11.18

4. 椎山 理恵、小野 紀子、石橋 正史、大塚 知子、高橋 勇人、天谷 雅行、谷川 瑛子、成分パッチテストでクロルフェニラミンマレイン酸、1,3-ブチレンジグリコール、ジフェンヒドラミンに陽性を示した pigmented contact dermatitis の1例、第47回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会、鹿児島島、2017.12.8
5. 筋野 和代、福島 彩乃、椎山 理恵、高橋 勇人、齋藤 昌孝、谷川 瑛子、ヒドロキシクロロキンによる薬疹症例のまとめ。第41回皮膚脈管・膠原病研究会、鹿児島島、2017.12.8

【2018年度】

1. 深澤俊貴、高橋勇人、亀山南琳、福田理沙、古畑汐梨、種村菜奈枝、天谷雅行、漆原尚巳。電子カルテデータからステイブンス・ジョンソン症候群および中毒性表皮壊死症を特定するアルゴリズムの検討。第24回日本薬剤疫学会学術総会、仙台、2018.10.13
2. 向井美穂、栗原佑一、野村尚志、新谷悠花、天谷雅行、高橋勇人、梅垣知子 中毒性表皮壊死症を合併し、瘢痕治癒部に乾癬の皮疹を生じた乾癬患者の1例。第70回日本皮膚科学会西部支部学術大会、島根、2018.11.11

【2019年度】

1. 椎谷千尋、大内健嗣、船越建、天谷雅行、高橋勇人。経過中に自己抗体が出現した薬剤性過敏症症候群および疑い例の検討。第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会、横浜、2019.11.30
2. Toshiki Fukasa, Hayato Takahashi, Nanae Tanemura, Masayuki Amagai, Hisashi Urushihara. Risk of Stevens-Johnson Syndrome and Toxic Epidermal Necrolysis Associated with Anticonvulsants in Japan. 35th International Conference of Pharmacoepidemiology. Philadelphia, USA, 2019.8.24-28

藤山幹子

【2017年度】

1. 秋山祥子、藤山幹子、増永泰枝、宮脇さおり、村上信司、佐山浩二。レベチラセタム(イーケプラ®)による薬剤性過敏症症候群の1例。日本皮膚科学会愛媛地方会第66回学術大会、松山市、2017年10月21日

【2018年度】

1. 増永泰枝、藤山幹子、松本圭子、佐山浩二。DPP-4 阻害薬関連類天疱瘡のパラドックス。第117回日本皮膚科学会総会、広島市、2018年5月31日-6月3日

【2019年度】

1. 藤山幹子、濱田信。Late-onset folliculitis during EGFR inhibitor therapy is caused by staphylococcal infection. 第17回臨床腫瘍学会、京都、2019年7月19日。
2. 藤山幹子。EGFR阻害薬投与中の後期毛包炎における黄色ブドウ球菌の関与。第49回日本皮膚免疫アレルギー学会、横浜、2019年11月30日。

新原寛之

【2017年度】

1. Hiroyuki Niihara, Kunie Kohno, Eishin Morita: Rrapid detection of HLA-A*31:01:02 using loop-mediated isothermal amplification method. The 3rd Stevens-Johnson syndrome symposium, kyoto, Feb 3-4, 2018

【2018年度】

1. Hiroyuki Niihara: The utility of HLA-A*31:01:02 LAMP assay and HLA-B*58:01:01 LAMP assay in patients with cutaneous adverse drug reaction. The 4rd Stevens-Johnson syndrome symposium, kyoto, Jan 26-27, 2019
2. Niihara H, Kohno K, Morita E: Rapid detection of HLA-A*3101 and HLA-B*5801 by Loop mediated isothermal amplification (LAMP). The 10th International Congress on Cutaneous Adverse Drug Reactions. Shimane, November 11, 2018

3. Komatsu-Fujii T, Chinuki Y, Niihara H, Hayashida K, Ota M, Kaneko S, Morita E: The thymus and activation-regulated chemokine (TARC) level in serum at an early stage of a drug eruption is a prognostic biomarker of severity of systemic inflammation. The 10th International Congress on Cutaneous Adverse Drug Reactions. Shimane, November 11, 2018
4. 小松貴義, 千貫祐子, 新原寛之, 林田健志, 太田征孝, 金子 栄, 森田栄伸: 薬疹早期における血清 TARC 値は薬疹の重症度予測マーカーとなりうる. 第70回日本皮膚科学会西部支部学術大会. 松江市, 2018年11月10日~11日
5. 小松貴義, 千貫祐子, 新原寛之, 林田健志, 太田征孝, 金子 栄, 森田栄伸: 初診時の血清 TARC 迅速測定によって DIHS の早期診断が可能であった 1 例. 第70回日本皮膚科学会西部支部学術大会. 松江市, 2018年11月10日~11日

該当なし。

【2019年度】

1. Hiroyuki Niihara: Detection of rickettsial pathogens present in erythema multiforme by LAMP method. The 5rd Stevens-Johnson syndrome symposium, kyoto, Feb 8-9, 2020
2. 新原 寛之, 河野 邦江, 東 耕一郎, 越智 康之, 中川 優生, 白築 理恵, 太田征孝, 飛田 礼子, 千貫 祐子, 金子 栄, 森田 栄伸: カルバマゼピン誘導型薬疹例における HLA-A*31:01 の LAMP による検出のまとめ: 西日本皮膚科 (0386-9784)81 巻 5 号 Page430(2019.10)

G. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

F. 健康危険情報